

ユニット3：ラーマヤナの主要登場人物の紹介とあらすじ (ver 1.3)

概要

ラーマヤナ Rāmāyaṇa. Rāma+ayana 「ラーマ王子の事績」の意。ヴァールミーキ作とされるサンスクリット語全7編(2万4千詩節)が標準的なテキストとされるが、インド・東南アジアに無数のテキストが存在する。原型は前2世紀頃に成立、2世紀頃に現在の形が完成。ラーマをヴィシュヌ神の転生とする設定や第7編は後期に付加されたと推測されている。

物語(ストーリー)はトレター・ユガの時代に設定されている。ラーマ王子はヴィシュヌ神の7番めの転生とされる。パラシュラーマは同じく6番目の転生。ラーマの昇天をもってトレター・ユガが終わり、ドヴァーパラ・ユガが始まる。

物語は、ヴァールミーキ仙がラーマの二人の息子たちに父ラーマの事績として詠って聞かせたものを、息子たちが記憶し、ラーマ王の前で詠唱したものであると第7編の中で説明。

登場人物(登場順と血縁関係による。読みはサンスクリットによる。)

| | |
|-----------------------|---|
| ダシャラタ Daśaratha | コーサラ国の王。ラーマの父。 |
| ラーマ Rāma | コーサラ国の王子。ダシャラタ王とその第1カウサリヤーの息子。 |
| バラタ Bharata | ラーマの弟。第2王妃カイケーイー妃の息子。 |
| ラクシュマナ Lakṣmaṇa | ラーマの弟。第3王妃スミトラー妃の息子。シャトルグナと双子。 |
| シャトルグナ Śatrughna | ラーマの弟。第3王妃スミトラー妃の息子。ラクシュマナと双子。 |
| ヴィシュヴァーミトラ Viśvāmitra | 聖仙(ルシ)。ラーマの師。 |
| ジャナカ王 Janaka | ヴィデーハ国の王。シーターの父。 |
| シーター Sītā | ヴィデーハ国の王女。ジャナカ王の娘。 |
| パラシュラーマ | 「斧を持ったラーマ」の意。クシャトリヤに復讐するバラモン戦士。 |
| ラーヴァナ Rāvaṇa | ランカー島(スリランカ)の羅刹(Rakṣas)の王。十面二十臂。別名ダシャムカ(Daśamukha 十の顔)ダシャカナンタ(Daśakanṭha 十の首) |
| シュールパナカー Śūrpanakhā | ラーヴァナの妹。羅刹。 |
| ヴィビーシャナ Vibhīṣana | ラーヴァナの弟。羅刹 |
| クンバカルナ Kumbhakarna | ラーヴァナの弟。羅刹。 |
| インドラジット Indrajit | ラーヴァナの息子。羅刹。 |
| ヴァーリン Vālin | キシュキンダーの猿の王。スグリーヴァの兄。 |
| スグリーヴァ Sugrīva | ヴァーリンの弟。 |
| ハヌマーン Hanumān | スグリーヴァの配下の猿の大将。 |
| ヴァールミーキ Vālmīki | 仙人。『ラーマヤナ』の作者。 |
| クシャ Kuśa | ラーマとシーターの息子。ラヴァと双子。 |
| ラヴァ Lava | ラーマとシーターの息子。クシャと双子。 |
| ジャターユス Jatāyus | 秃鷹。ジャナカ王の友。 |
| アグニ Agni | 火神。 |

あらすじ

第1編「少年の巻」

コーサラ国王ダシャラタはヴィシュヌ神の化身であるラーマなど4人の王子を得た(カウサリヤー妃からラーマ、カイケーイー妃からバラタ、スミトラー妃からラクシュマナとシャトルグナ)。ヴィシュヴァーミトラ仙の薫陶を受けたラーマは、ジャナカ王の宮廷で開かれた婿選びの競技で優勝し、王女シーターと結婚する。ラーマはパラシュラーマを打ち負かす。

第2編「アヨーディヤーの巻」

ダシャラタ王はラーマに王位を譲ろうとするが、カイケーイー妃の干渉にあって、バラタを王位につけること、ラーマを14年間森に追放することを余儀なくされる。ラーマは父の命にしたがい、シーター妃とラクシュマナに伴われてアヨーディヤーの都を出るが、残された王は悲しみの余り絶命する。バラタはラーマを引き戻そうとするが拒絶され、ラーマから譲り受けた履き物を王座に置いてラーマの代理として統治する。

第3編「森林の巻」

ラーマたちは行者たちを邪魔する羅刹たちの退治に活躍する。シュールパナカーはラーマに懸想して拒絶されラクシュマナからは侮辱を受ける。彼女は復讐のため兄ラーヴァナにシーターをさらって妻にするようそそのかす。小鹿を使った奸計でシーターを誘拐したラーヴァナは、シーターを救おうとしたジャターユスを倒し、ランカー島に帰還する。失踪したシーターを探すラーマたちはキシュキンダーでスグリーヴァとその家来の猿たちに出会う。

第4編「キシュキンダーの巻」

ラーマはスグリーヴァが兄ヴァーリンから王国と妻を取り戻すのを手伝い、代わりにスグリーヴァの部下たちにシーター探索の援助をうける。ハヌマーンはランカー島にシーターが誘拐されたことを突き止める。

第5編「美しい巻」

ハヌマーンは海を飛び越えてランカー島へ渡り、シーターと接触し、ラーマの指輪を渡して救出が近いことを知らせる。ハヌマーンは羅刹たちに捕まるが、ラーヴァナの宮廷を火の海にしてラーマのもとに帰還する。

第6編「戦闘の巻」

ラーマたちは猿たちの力によって海に橋を架けてランカー島に攻め込む。ヴィビーシャナは兄を諫めるが聞き入れられず、ラーマに協力する。激しい戦いの末、ラーマはラーヴァナを倒し、ヴィビーシャナを王位につける。ラーマに貞操を疑われたシーターは火の中に身を投じるが、火神アグニが現れてシーターの潔白を証明する。一行はアヨーディヤーへ凱旋し、ラーマは王位につく。

第7編「最後の巻」

国民の間にシーターの貞操を疑う声が生じ、ラーマはシーターを森に追放する。シーターはヴァールミーキ仙の庵に滞在し、クシャとラヴァの双子を産む。ヴァールミーキ仙は二人に『ラーマーヤナ』を語って聞かせる。二人が物語を朗詠するのを聞いたラーマは、シーターに身の潔白を証明するよう求める。シーターが大地の女神を呼び出すと、女神はシーターを抱いて地中に消える。嘆き悲しむラーマは王位をクシャとラヴァに譲り、天界に昇ってヴィシュヌ神に戻った。

参考文献

- 青山亨 1994 「ラーマ、ラーヴァナ、ハヌマーン—ポリフォニーとしての叙事詩とその英雄たち」『しにか』1月号. 5 (1): 62-67.
- 青山亨 1998 「インドネシアにおけるラーマ物語の受容と伝承」『ラーマーヤナの宇宙：伝承と民族造形』金子量重・坂田貞二・鈴木正崇・編. 春秋社.
- 青山亨 近刊予定「プランバナン寺院シヴァ堂のラーマーヤナ浮彫」『画像史料論（仮題）』東京外国語大学出版会.
- 阿部知二・訳 1966 『ヴァールミーキ ラーマーヤナ』（世界文学全集 III-2）東京：河出書房.
- 石井米雄・他編 1991 『インドネシアの事典』京都：同朋舎. とくに「ジャワ文学」「ラマ」「ラマヤナ」「ラワナ」「ワヤン」の項目.
- 岩本裕 1980 『ラーマーヤナ』第1巻. 東京：平凡社. とくに解題.
- 岩本裕 1985 『ラーマーヤナ』第2巻. 東京：平凡社. とくに解題.
- 河田清史 1971 『ラーマーヤナ』（レグルス文庫）全2巻. 東京：第三文明社.
- 中村了昭 2012-2013 『新訳 ラーマーヤナ』全7巻. 東京：平凡社.
- 松本亮 1982 『ワヤン人形図鑑』東京：めこん.
- 松本亮 1993 『ラーマーヤナの夕映え』東京：八幡山書房.
- 松本亮 1994 『ワヤンを楽しむ』東京：めこん.



ジャワのワヤン人形：左からラーマ、ハヌマーン、ラーヴァナ、シーター。